編 集 後 記

『臨床評価』の創刊とコントローラー委員会の創設に尽力され，以来52年間編集長を務められた栗原雅直先生が逝去されました．

私は，2023年に編集委員に加えて頂きましたので，編集委員会で栗原先生と席を同じくする機会はありませんでした．そればかりか直接お話を伺う機会も，2016年6月に幕張で開かれた日本精神神経学会学術総会の企画「先達に聴く」でのご講演の一回しかありません．しかし，栗原先生の訃報に，私は大きな喪失感を覚えましたし，今もその感覚は変わりません．

私は，1990年代に，椿広計先生を中心にした勉強会で当時恵比寿にあった委員会のオフィスに毎月通っていました．椿先生の追悼の文章の中で紹介されている，茂木浩介君の「樹形モデルによる脳循環代謝改善治療の予後予測」の論文になった分析を巡って議論したことも懐かしく思います．毎回，研究会が終わると，委員会の歴史を知り尽くした職員の方々も一緒に恵比寿の町に出て夕食を共にするのも恒例で，委員会の歴史や栗原先生をはじめとする方々のエピソードも伺うことがありました．

委員会と本誌は，ICH-GCPに基づく新GCPに転換するまで，臨床試験の方法論の検討においても，第三者管理の実務においても，「第三者」として，官からも独立し，企業にも阿らず，いわゆるグローバル化の流行にも安易に迎合することなく，活発な議論の機会を作りながら地道に活動を積み重ねて来たと言って良いと思います．私は，本誌のバックナンバーの掲載論文からも，勉強会やその後の夕食で伺うエピソードからも，栗原先生に臨床家としてまた学者として，また編集長としての誠実さとその誠実さを支える独立の気概を感じたのでした．そして，新GCP後も本誌は独自の姿勢を保ち続けて来ました．

さて，栗原先生は最後に執筆された2022年の49巻3号の編集後記で「創設時のこの志を，細々とでも守り続けることができたことを誇りに思っている．本誌34巻1号編集後記では，『たゆたえども沈まず』とのパリ市を評する言葉に喩えたものだった．この編集方針を堅持し続けたいという当時の気持ちは，今もゆらぐことはない．」と記されました．「たゆたえども沈まず」，根底に独立の気概を大切に持ち続けて来られた栗原先生，そして編集委員会ならではの言葉なのだと思います．これからも「たゆたえども沈まず」であり続けたいものです．

（山内慶太）